教行信証……」

とあるのが定本化したる御本書の在り方の如く常識化しておる。これは存覚の「六要鈔所釈本」標挙之文の在り方が左様になっておる。『阪東本』ではこのところが欠失しておるがおそらくそこでは『西本願寺本』と同様な様態であったと思われる。古写本として現存するもののうち由緒、伝来の尤も正しくして権威のある、かつ年代の古い『高田本』と『西本願寺本』のこの標挙之文の書写されておる位置とその様態は、「六要所釈本」のそれとは異るのである。

『高田本』と『西本願寺本』とは一致するし『阪東本』もおそらく上の二本と同様であったと推考されるから現存の尤も古い権威ある三本の在り方にかえして親鸞の信体験の自覚体系を追求し思索すると『教行信証』の三序のダイナミックな円融相即の面影が出てくる。ここから親鸞が本書に於てしばしば現表しておる聖人の時間感覚が出て来るのでないかと思う。今試みに一つのアイディアを提案する。

如来等同について

松　原　祐　善

親鸞聖人の晩年の『正像末和讃』や『一念多念文意』やその他多くの御消息には、現生正定聚ということが目立って強調されている。すなわち真実信心のひとは現生に正定聚に住し、補処の弥勒と同じく無上大涅槃を証する身と定まるのである。本願を信ずる行人は摂取不捨のゆえに等正覚にいたり、弥勒菩薩と等しいのである、この便同弥勒の思想から諸仏等同の思想へと展開され、更らに如来と等しいという表明が、八十五・六歳の聖人における信心のよろこびの最高潮とも思われるので、今回聖人の御消息を中心にその信境展開のあとをたずねてみたいと思うたのである。無論この方面の研究も既に先輩によって試みられているので、私として新しく加える何ものもないが、今日報恩講を迎えて祖徳讃仰の一端にもなれかしと思うばかりである。

まず聖人の御消息中に弥勒等同のことがはじめてみられるのは、東本願寺所蔵の「かさまの念仏者のうたがひとはれたる事」と外題する真蹟書簡である。これは消息というよりも法語という方がふさわしいようであるが、『教行信証』信巻末の真仏弟子釈と対応してよくその要をつくせることが思われる。この日付が建長七年丁卯十月三日愚禿親鸞八十三歳書之とあるが、この建長七年頃といえば善鸞をめぐりて関東教団には大きな動揺波瀾が見られる時である。すなわち建長七年の三月三日日付と推定される常陸門弟に与えられし消息。同年九月二日日付の迫害をうける念仏者に宛てられし消息。そして今の法語が十月三日であるが、十一月九日日付の善鸞に宛てられし消息。翌建長八年正月九日日付の真浄坊への消息。而してこの年の五月二十九日に慈信坊善鸞に対して義絶状を発せられているが、やがてはかかる教団崩壊の危機のなかに聖人の信仰はいよいよ透徹し、高揚されていったものと思われる。

如来等同の語がうかがわれるはじめての消息は正嘉元年十月十日日付の性信坊へ宛てられし消息である。そのなかに「『大無量寿経』には摂取不捨の利益にさだまるものを正定聚となづけ、『無量寿如来会』には等正覚ととき、その名こそかわりたれど正定聚・等正覚はひとつこころひとつくらゐなり」とあり、「真実信心のひとはこの身こそあさましき不浄造悪の身なれども、こころはすでに如来とひとし云々」とのべ「信心のひとのこころつねに浄土にゐたり」といい「これは等正覚の弥勒とおなじとまふすことによりて、信心のひとは如来とひとしとまふすなり」と結ばれている。又同年同日の日付にて真仏坊に宛てられし消息には、終りに「これは如来とひとしといふ文どもをあらはししなり」とあって、まず『華厳経』（晋訳）「入法界品」最後の偈頌の結文「聞二此法一歓喜、信心無疑者、速成二無上道一、与二諸如来一等」を、初めの三句を一句におさめて「信心歓喜者、与諸如来等」として引用されて「信心よろこぶひとはもろもろの如来とひとしといふなり」と述べ、次に『大無量寿経』より釈尊のみこととして「見敬得大慶則我善親友」の文を引き、更らに阿弥陀の第十七願文等を引きてその文証としてあげられている。

この真仏坊宛て消息を読んでのものと推測される正嘉二年二月十二日日付の浄信上書がある。この上書に対する聖人の御返事が真蹟書簡として専修寺に所蔵されている。それとともに同じく専修寺所蔵の正嘉二年十月二十九日日付の慶信上書と、それへの聖人の加筆と蓮位坊の添え状等を参照しつつ、正嘉二年十二月顕智坊聞書の自然法爾の法語に及ぶその思想の展開をあとずけて紹介。併せて『正像末和讃』の夢告讃（康元二歳二月九日）の重要性。それと草稿本（正嘉元年丁巳三月一日）より初稿本（正嘉二年九月二十四日）へ、その後の文明開版本への移りゆきを吟味紹介す。

宋代の学僧常総について

間野潜竜

宋代の仏教といえば、禅および浄土に代表されるというが、いわゆる宋代の学問、とくに宋学の形成には、禅学の影響が甚だ顕著である。ところで宋学を形成してきた宋代士大夫は、おおむね科挙を経由した人々であって、彼等はまず経学の教養をもとにして詩文にも熟達し、科挙に登第して後、官僚の地位を獲得したものであり、その点では新しい時代の支配層を形成した新官僚階層であるといえる。そして彼等は官僚となって後も、さらにその教養をひろめ、自己の知識をより豊かにするために、種々の方面から知識を摂取しようとする。ここに仏教や道教が彼等に迎えられた理由がある。そしてとりわけ受け入れやすかったのが禅学であろう。

ところで唐から五代にかけて二度の廃仏があり、仏教は大きな打撃をうけたといわれるが、それを地域的に見ると、廃仏の影響の大きい所は、どうしても都を中心とした北中国であり、とくに後周の勢力は江南にまで及んでいなかったので、揚子江